
翼持つ守護者

鉄宝樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼持つ守護者

【Zコード】

Z2481F

【作者名】

鉄宝樹

【あらすじ】

「邪魔だ、出て行け」その一言を聞いた途端、リディスの中で何かがぶち切れた。神の護衛を務めていた翼持つ守護者最強のリディスは、ある日御子の護衛へ人事異動になつた。初対面で水を掛けると最悪だったが、やがてお互いはかけがえのない存在となつていく。しかし、悲劇は起きてしまつた・・・。

第一話 最強と言われた護衛に人事異動を

「御子、あなたは何も悪くない。全てはあなたをこんな風にしてしまった……私の罪だ」

そう、全て自分が狂わせてしまった。何もかも。だからあんな悲劇が起ってしまったのだ。

はるか遠い過去。

空も海も存在しなかつた混沌の世界に神が生まれた。ほどなく女神が生まれ、一人は力を合わせて一つの世界を生み出した。

それが樂園。

神が住む宮殿が建てられた中央エリアの四方を、広大な森で囲まれた美しい園。神に仕える者たちは街を構えて住み、樂園に存在する聖なる獣や鳥は森で生きる。そんな平和な場所に、翼持つ守護者と呼ばれる種族がいる。

その種族は、様々な人型の種族の中で唯一その身に翼を持つ種族だ。宮殿の奥にある『アメバルデ』という真っ白く大きな花から生まれて来るこの種族は、神に仕え、神と樂園を守る戦士たちである。その中でも最強と言われ、神の護衛を務めているのは、翼持つ守護者でも珍しい双子の片割れであるリディスだった。

輝く銀色の短髪と瞳。雪のように白いすべすべの肌と整った目鼻立ちをしている。同胞の中では古株になるが、身長は小柄に部類される。

翼持つ守護者は皆、美しい容姿を持っていた。その中でもリディスには、芸術家の最高傑作とも言えるくらいに飛びぬけた美しさがあった。

樂園の中央にそびえ建つ宮殿の廊下を歩き、神から直々に命を賜つたり。リディスは、与えられた自室へと戻つた。

扉を開けると、消したはずの明かりは付けられており、中には誰かがいる気配があつた。部屋に置かれたソファには、リディスの双子の片割れであるアレイヤが座つていた。

リディスと同じく銀の髪と目を持ち、全く同じ目鼻立ちをしている。違いと言えば、少しアレイヤの方が背が高いと言つ事だ。ちなみに、これはリディスの長年の悩みである。

普段翼持つ守護者は、大きな翼を仕舞つて生活している。

アレイヤは翼持つ守護者で編成された戦士団^{ワイヤンテル}の団長を務め、戦士団に所属する者たちは、神の護衛であるリディスと違つて、敷地内に建てられた兵舎で暮らしている。

「なんだ、アレイヤか。確かに南方の調査団の護衛に行つっていたんだや」

「ついさっき帰つてきた」

宮殿を守るのが役目である戦士団だが、平和な樂園で荒事は少なく、遠方へと赴く調査団などの護衛にも駆り出される事がある。

「報告は済んだのか」

リディスはそう言いながら、アレイヤの向かいにあるソファに腰掛けた。アレイヤが用意してくれたカップにお茶を注ぎ、乾いた喉を潤した。一口飲むと、カップから口を離して片割れを一瞥した。どうやら少し不機嫌のようだ。

「報告ついでに新たな命を賜つた。本日より、神の護衛に任命された」

アレイヤは机に片手を付いて身を乗り出した。

「御子の護衛に任じられたのは本当か」

「ああ、先ほど神より直々に命を賜つた」

アレイヤは机をバンと叩いた。

「なんでお前が御子の護衛に左遷されるんだ！？」

リディスは飲み終えたカップを机に置いた。

「違う、違う。左遷じゃない」

神の子であり、次代の神になる御子は、部屋に閉じ籠つて誰とも話そうとしない方だ。

これまで多くの者が御子の護衛に任じられた。しかし、護衛役とは名ばかりで、実質は御子の世話係である。御子の世話をしようとした者たちは皆、御子の重なる悪戯に手を焼き、泣きながら護衛役を返上していく。アレイヤが左遷と思うのは、ある意味無理もない。適任者は見つからなくて困った神は、こうなつたらリディスに任せてみようと考えたのだ。

「これまで護衛役を任じられた奴らは皆、御子の悪戯に手が追えなくて辞めていったと聞くが、お前は大丈夫なのか」

アレイヤの心配にリディスは軽く笑つた。

「心配ない。悪戯くらいで役目を返上したりしないさ

「そういう意味じゃないんだが……」

リディスには聞こえないように、アレイヤは小さく溜め息を付いた。

自分の心配が杞憂で終わらなかつた事を、アレイヤは後に知る事になるのであつた……。

リディスはアレイヤを見送つた後、部屋にある私物を纏めた。神の住居である宮殿の他に、敷地内には女神の宮殿と御子の宮殿があり、御子の護衛となつた今、リディスは御子の宮殿に暮らす事になる。

もともと最低限の物しか置いてなかつた為に、片付けは直ぐに終わつた。外へ出て翼を広げ、御子の宮殿へと飛んでいく。

宮殿に辿り着くと、門番を務める同胞に迎えられた。

同胞はリディスの姿を認めるか、目を見開いた。

「リディス！？ どうしてお前が此処に」

「あれ、聞いていないのか。今日から私が御子の護衛を務める事に

なつたんだ」

リディスが答えると、門番は顎が外れるくらいに口をポカんと開けた。

「なつ！ お前が左遷って、一体何やらかしたんだ！…」「何で左遷になるんだ」

リディスは少し悲しくなつた。

皆、私を何だと思つているんだ……。

女官に新たな自分の部屋に案内され、リディスは荷物を片付け始めた。

作業が終わると、早速御子の部屋に向かつた。長い廊下を歩き、途中ですれ違う女官や警護兵に挨拶しながら歩を進める。

目的地に近付くに連れて、出会う人の数が減つていく。必要最低限以外は誰もこの部屋に近付こうとしない。それだけ御子の評判は悪く、御子自身も干渉を拒んだ。

神の護衛を務めていたリディスだが、御子の宮殿に近づく事は無かつた為に、御子と会つた事がない。

どんな人物なのだろうかと思いながら、コンコンと扉をノックした。しかし、中から返事はない。仕方ないと扉を開けて足を踏み入れた。

部屋は真っ暗だった。廊下からの光が差し込むが、一部の床しか照らされず、中の様子は分からない。

噂どおり、本当に閉じ籠つこもているんだな……

リディスは近くにあつた窓のカーテンを開けて、部屋を明るくした。

物は散らばり、埃は積もり、荒れ放題だった。

部屋の奥に置かれたベッドに人影があつた。この部屋の主である御子だ。

無表情でこちらを睨んでいる。リディスを観察しているようだ。

カーテンを開けた事により起きた風で、辺りに積もつた埃が舞い上がった。

「ゴホツ、ゴホゴホツ」

リディスは咳き込みながら、部屋の全てのカーテンと窓を開けていく。開けるたびに部屋の中に光が差し込み、暗かった部屋が明るくなる。それと同時に舞い上がる埃の量も増えていった。

最後の窓を開け終えると、後ろから気配が近付き声を掛けられた。リディスは振り返った途端、冷たい衝撃を頭から浴びた。

「わあ！」

すぐにそれが水だと分かる。

目を見開きながら前を見ると、空のコップを手にした御子が立っていた。

衣服はだらしなく身に纏い、皺だらけになっている。髪もボサボサで、本来美しいであらう金髪の色はくすみ、痛んでいるのは一目瞭然である。

「邪魔だ。出て行け」

その一言を聞いた途端、リディスの中で何かがぶち切れた。

リディスに代わって神の護衛になつたアレイヤは、初めて神の執務室を訪ねた。

「おお、お前がアレイヤか。双子なだけあつて、リディスとそつくりだ」

「この度、お側にお仕えさせて頂く事を光榮に思います」

アレイヤは、恭しく^{ひれまがひ}跪いて頭を垂れた。

「頭を上げよ。堅苦しいのは無しだ」

「はい」

言われた通り頭を上げるが、跪いたまま、おそるおそる声を出す。リディスと違つて、アレイヤは神と直接話すのは、これが初めてだ。緊張の為に身体が縮こまってしまう。

「あの、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか」

そんなアレイヤを、神は初々しそうに見つめた。リディスと同じ顔でありながら、こうも態度が百八十度違うので、神は新鮮な気持ちで内心面白がっていた。

「何かな」

「なぜリディスを御子の護衛になさったのですか。同胞の中でも最強であるリディスこそ、神の護衛を務めるべきであるのに。それに、リディスはあのように見えて気が短い上に、遠慮を知りません」

「知っているよ、私もリディスに怒られたからな」

神の言葉に、アレイヤは言葉を詰まらせた。咄嗟に声が出せず、これでもかと見開いた目で本当かと訴えた。

「一度、リディスには内緒で城下に忍びで出かけた事があつてね。後で酷く叱られた。まさかリディスがあそこまで怒鳴るとは思わなかつたよ。それ以来、仕事をサボろうとするたびに怒られた」「アレイヤは頭を抱えながら肩を震わせた。

あいつ、なんて恐れ多い事を……！」

御子に対してやらかさないかと心配していた事を、既に神にしていた事を知ったアレイヤは、勢い良く神に向けて土下座した。

「申し訳ありません！我が片割れが、なんと無礼な事を……！」

対して返ってきた神の言葉は、見当違ひなものだつた。

「ははっ。気にすることない、アレイヤ。むしろ嬉しかつた」

「は？」

神の言葉の意味が理解出来なかつたアレイヤは、素つ頓狂な声を出して、神の顔を見た。

「周りの者は皆、私に遠慮して何も言つてくれない。リディスだけだつたよ。私は遠慮せずに言つてくれたのは。私にはそういう者が必要なんだ。いや、私だけじゃない。御子にもだ」

アレイヤはこの時、それでもリディスが御子に対して、無礼な事をしていなければいいと考えていた。しかし、その杞憂さえも無駄に終わる事を後に知るのであつた。

第一話 ぶち切れた護衛は、最凶に忍い

広い部屋に、ガツーンと鈍い音が響き渡った。

御子はズキズキと痛む頭を押さえながら、面を食らったような顔でリディスを見た。

「何をする！？」

「何をするはこっちの台詞です！！！」

怒鳴りつけようとしたが、逆にものすごい勢いで怒鳴りつけられた。綺麗な顔に似合わず迫力があつた為に、思わず身を竦めてしまう。

「それより、この汚さは何ですか！ 恋を開けなさい！ 部屋も空氣も汚い。服や髪もぐちゃぐちゃじゃないですか！」

リディスの言葉を、御子は何が起きたんだというような顔で聞いていた。

何の反応も示さない御子に痺れを切らし、リディスは御子の腕を掴んで引っ張つていく。

「お、おい！ 何処に行く！？」

御子の問には答えず、リディスは無言で歩いていく。

向かったのは、室内に設けられた浴室。

広く豪華な浴槽が田を引くが、リディスがそんな物に田もくれずに御子の服を脱がせると、容赦なく頭からお湯をかけた。

「よ、よせ！」

抵抗する御子に構わず、リディスは自分の服の袖を捲くつて、御子の頭や身体を洗い続けた。

洗い終え、髪を乾かして服を着せた御子を部屋のソファに座らせると、リディスは濡れた上着を脱いだ。御子の向かいにあるソファに上着を放り投げ、今度は部屋を片付け始めた。散らばった物を棚に入れ、積もった埃を落としていく。

御子は呆然と目の前の光景を見つめていた。

掃除を終えると、リディスは御子が座るソファの前の机に大量の本を置いた。何かと思えば、勉強道具一式だ。

「嫌だ」

御子はムツとした表情でリディスを睨んだ。

「次の神となる為に、お勉強するのが御子のお役目です」

御子の言葉など聞きもせず、リディスは自分の上着を置いたソファに腰掛けた。御子に水を掛けられた髪を拭きながら、本を開けていく。

そんな様子が気に入らなかつたのか、御子は立ち上がり、ベッドへ戻ろうとする。

すかさず、リディスは御子の襟を掴み、力ずくでソファに座らせる。

「ああ、お勉強です」

文句の一言でも言ってやるうと思つたが、口を開ける前にリディスに睨まれ、御子は渋々ペンを握つた。

それを見て、リディスは満足そうに微笑んだ。

「では、まずはこの問題から致しましょう」

それからしばらくの間、リディスの御子を叱る声が止まなかつた。「どうしてこんな問題も出来ないんですか！」今までちゃんと勉強していなかつたんでしょう。部屋に閉じ籠つている間、一体何をしていたんですか！？」

御子は悔しそうにペンを強く握りながら、問題を解いていった。

「そこ、違います！」

一通り勉強を終え、食事の時間になつた。

リディスは一旦勉強道具を片付けると、食事を乗せた盆を机に置いた。

「お疲れ様でした、お食事です」

しかし、御子が全く手を付けようとなかつたので、リディスは

不審に思つて尋ねてみる。

「どうされましたか？」

「……食べたくない」

「気分でも悪いのですか？」

「嫌いな物ばかりだ」

そう言つてそつپを向く御子に溜め息を付き、リディスは匙さじを手に取つた。そして、遠慮なく御子の胸倉を掴む。

何事かと御子がリディスを見た途端、リディスは御子を自分の許に引き寄せ、口を抉こじ開けた。

「うわっ！……っ！」

そして、御子の口の中に食事を掬すくつた匙を突つ込んだ。御子が突然入れられた異物を吐き出そうとするが、すかさず御子の口を閉じて防ぐ。

そうされては御子も飲み込まざるを得ない。目に涙を溜めながら、口の中の物を飲みきつた。

それを見届けたリディスは御子の口から手を離し、口の中に残る味に顔を歪める御子に水を差し出した。

御子は奪い取るように水を手に取つて飲み干した。一息つくと、リディスを睨む。

「何をする！」

「好き嫌いはいけません。全て食べていただきます」

御子の激怒など氣にもせず、リディスは新たに匙で掬う。

「嫌だ」

「無理矢理口に入れられるか、ご自分で食べるか、どちらかお好きな方をお選び下さい」

御子は言葉を詰まらせ、机に並ぶ食事とリディスを交互に見ながら考えた。そして、戸惑いながらも匙を取つて、おそるおそる食事を口に入れていく。

リディスは満足したように微笑みながら、その様子を眺めていた。

おそらく、御子にとつては最も長い一日だつただろう。

とうとう夜が來た。

疲れた御子は、リディスによつて綺麗に整えられたベッドでぐつすり眠つていた。

汚かつた部屋は綺麗に片付き、何も置いてなかつた机には勉強道具が置かれたままになつていた。

一時はどうなるかと思ったが、決して悪い人物ではない。ただ素直に相手と話しあえなくて、我が儘に育つてしまつただけだ。

リディスは御子の頭を撫でて微笑んだ。そして、起こさないよう静かに部屋を出る。扉を閉め、仄かな蠟燭の明かりを頼りに、暗い廊下を歩く。

やはり、覚えていないか……。

リディスは一度足を止め、もう暗闇で見えなく御子の部屋をもう一度見た。

自室の扉を開けると、誰もいないはずの部屋の中には明かりが灯つていた。

御子の部屋へ向かつたのは明かりを必要としない昼時、それから今までずっと御子の許にいたのだから、明かりなど付いているはずが無い。

リディスは不審に思つて眉を顰めた。^{ひそ}おそるおそる部屋に足を踏み入れると、ソファに何かがいる事に気付く。毛布を被つていて、正体が分からないそれをゆっくり覗きこむと、視界に入ったのは自分と同じ顔だつた。

「アレイヤ！？」

思わず上げた声に反応して、アレイヤは目を覚ました。

「どうして此処にいるんだ、自分の部屋で寝たらいいだろ？」

まるで自分の部屋のように、上体を起こして眠たそうに目を擦る

アレイヤに、リディスは「王立ちをして文句を告げた。

「お前を待つていたら眠くなつたんだ。戻るのが遅いんだよ」

呑気に欠伸をする片割れに、リディスは肩を落とした。

一体いつから此処で眠つっていたのだろうか。

「前から言おうと思つていたが、勝手に部屋に入らないでくれ」
頭を抱えながら言うリディスに対して、アレイヤの言葉は弾んでいた。

「良いだろう、双子なんだから。お前の物は俺の物、俺の物はお前の物つて事だよ」

まだ俺の物は俺の物と言わないだけマシと思つべきなのだろうか。全く真剣に話を受け止めていないアレイヤに、リディスは深く溜め息を付いた。これ以上言つても意味がないと諦め、話題を変える。「で、用件は何？ 私だって眠いんだ」

「お前、神に対して怒鳴りつけたそうだな」

一瞬リディスは頭の中で過去を振り返つた。結果、出て来た言葉は一言。

「何の事で？」

いっぱいありすぎて分からないと呟くリディスに、アレイヤは憤りが溢れてきた。

「お前なあ……神が今までお前を護衛にし続けた理由が、俺には理解できないよ」

アレイヤが怒つている理由が思い当たらず、リディスは首を傾げた。

そんな片割れの様子を見て、今度は怒りに肩を震わせていたアレイヤが大きな溜め息を付いた。同時に大袈裟なまでに肩を落とす。

「もういい。とにかく、リディス。御子に対して無礼はするなよ」
アレイヤの言葉を聞いて、リディスは不自然に目を逸らした。アレイヤはそれを見逃さない。

「リディスー。お前もしかして」「えーと……」

「怒らないから言ってみろ」

リディスはアレイヤの目線に居心地の悪さを感じ、背中に冷や汗が流れている事に気付いた。

つい先ほどまで御子に対して強氣を見せていたリディスも、どちらかと言つと上の立場にいるアレイヤには敵わないようだ。

「その、御子に水をかけられて……つい……」

「まさか、殴ったのか」

「うん」

今度はアレイヤが頭を抱える番だ。やらかさないな」と注意しようと思つていたのに、もう手遅れだつたようだ。

「そのまま手が出る癖、どうにかならないのか

リディスの短気さは今に始まつた事では無い。よく同胞に身長の事をからかわれては、怒つて追い掛け回す事を繰り返していた。

「今更無理だ」

「だろうな」

キッパリと断言するリディスに、アレイヤは希望が見つかなかつた。最早どうにもならない。話を続ける気力を失つたアレイヤに、またもや睡魔が襲い掛かってきた。

「疲れた。帰るの面倒くさいし、此処で寝ていいか

「良いけど、ベッドは一つしかないぞ」

「一緒に寝ればいいだろう、小さい頃みたいに。此処のベッド広いから問題無いし」

すでに寝室に向かい始めているアレイヤの後を追いながら、リディスは言つた。

「お前は寝相が悪いから、出来れば一緒に寝るのは勘弁して欲しいんだけど」

「ハハツ」

そんなやり取りをしつつも、一人はベッドの中に入り、仲良く眠りについた。こうして寝るのは何時以来だろう。最早思い出せないほど久しぶりだ。

たまには双子で「夜を過ぐ」すのも悪くないだろ？。

第二話 大嫌いなあいつと鬼ごっこ

次の日、昨日同様に暖かな陽光が楽園の地を照らしている。まだ眠っているだろ？御子を起こす為に、リディスは御子の部屋を訪れた。

ノックをして、返事を待たずに扉を開けると、案の定部屋の中は暗く、主はベッドの中だった。

リディスは「失礼します」と言つてから中に入り、ベッドの横に立つて御子に声を掛けた。

「御子、朝ですよ。起きて下さい」

リディスの声に反応し、御子の臉まぶたがゆっくり開かれた。まだ眠いと意思表示をするように目を擦りながら上体を起こす。

御子の覚醒を確認すると、リディスはカーテンを開けて回った。「朝食をお持ちしますので、顔を洗つてお待ち下さい」

そう言つと部屋を出た。しかし、この時御子が、楽しそうに笑つている事に気付かなかつた。

「母様。お歌を歌つて下さい」

「まあ、また」

そう言いつつも、母は笑いながら僕を膝に乗せてくれた。

「御子は本当にこの歌が好きね」

「はい。大好きです」

母の暖かい笑顔を見ながら、優しい歌声を聴くのが大好きだった。

“いつまでも一緒にいようよ 暖かい緑の恵みを感じながら
いつまでも一緒にいようよ 暖かい膝に抱かれながら”

「マリア。ご本読んで」

「あら、またこの本ですか」

そう言いつつも、マリアは僕が差し出した本を受け取つて、僕の

隣に座つた。

「御子はこの本が本当に好きですね」

「うん。大好き」

マリアの隣に座つて、お気に入りの本を読んでもらうのが大好きだつた。

“ある所に一人の少年が、村人や動物たちと仲良く暮らしておりました”

皆本当に大好きだつた。

朝食を載せた盆を片手に、リディスは部屋の扉を開けた。
部屋に御子の姿は無い。そのかわりに、ベッドに掛けられた布団が膨らんでいた。

リディスは溜め息を付いて、机に朝食を置いた。そして、ベッドに近付き、布団を引き剥はした。しかし、そこにあつたのは、丸めて紐で結ばれた布団だつた。

「！！」

リディスが目を見開いた途端、上から何かが落ちてくる気配がして、咄嗟にベッドから離れた。同時に数本のナイフが、リディスのいた場所に突き刺さつた。

一息つくと、部屋の扉が勢い良く開いて、すぐに閉められた。
リディスは持ち前の動体視力で、一瞬御子の姿を捉えた。すぐさま体勢を立て直して追いかける。

御子は長い廊下をドタドタと足音を立てながら懸命に走り、リディスは怒った表情をしながら追いかけていく。

廊下には仕事をしていた臣下が何人かいて、驚きのあまり、手を止めて呆然と見ていった。

宮殿には、翼持つ守護者

（ウインガーディアン）

の他にも様々な種族が仕事をしている。
庭園を管理する花小人

（フレーフ）

文官を務める聰明な知識の箱

（ケーバリス）

綺麗好きを生かした掃除係の潔癖者

（クリーンティア）

もいれば、料理が上手な食の鉄人もいる。

富殿で働く者は皆、多かれ少なかれ、御子の事は知っている。部屋に閉じ籠つて出て来ない、悪戯好きで乱暴者という噂も流れていて、印象は最悪だ。姿を見た事がない者たちは、各自自分のイメージを作り上げている。

しかし、そのイメージは今日で消え去ってしまう事だろう。見覚えのない人物が廊下を走っている。しかも、後ろから御子の護衛となつたはずのリディスが追いかけている。ある意味、リディスがいたから皆は注目していたのだろう。

リディスが神の護衛をしていた時期は長い。御子の護衛になつたという話は、既に全ての富殿の者たちに知れ渡っていた。なので、リディスが追いかけている人物は、つまり……。

「お待ちなさい！ 御子！」

叫びを聞いてしまつた者たちは、一斉に声を上げた。

「――えええええ――」

閉じ籠つてしているので、少なからず陰気で暗い人物を浮かべていたのだろう。まさか富殿を走り回る姿を見ると思つていなかつた者たちは、大声を出して驚き、鬼ごっこをする一人の背中をいつまでも見送つた。

長い廊下が終わり、御子は中庭に出た。しかし、そこで力尽きて膝に手を付く。

息が乱れる御子とは逆に、リディスは息一つ乱していない。

「部屋に閉じ籠つて運動しないから、すぐ力尽きてしまうんです」

そう言つと、御子の服を掴んで引っ張つていく。

「さあ、今日もみつちりお勉強です。運動の時間は、また後ほどたっぷり取りますので」

「離せ！ 勉強なんてしない！」

御子は力一杯暴れるが、翼持つ守護者の中でも最強と言われるリディスには、意味を成さなかつた。

「いけません！」

そんな様子を、周りの者たちは呆然と見ていた。

アレイヤは神の執務室を訪れた。

恐れていた事態が起きてしまい、アレイヤの心臓は鼓動が異常に速い。つい先ほど、知り合いから速報を聞いた時は、一瞬心臓が止まつたような気さえした。

「失礼します」

緊張な面持ちのアレイヤを迎えたのは、神の弾んだ声だった。
「おお、アレイヤ。御子とリディスが宮殿の中を走り回ったそうだな」

神は執務机に座つて、アレイヤに声をかけた。書類にペンを走らせながら言う、その顔はとても嬉しそうだった。

「申し訳ありません。片割れが御子に大変ご無礼を……」

既に神の耳にまで入っていた片割れのとんでもない行動に、アレイヤは畏まつて頭を下げた。

「構わない。むしろ、御子が外に出た事に喜んでいる」「しかし……」

「アレイヤ、しばらくはリディスは任せてみよう」

そう言われては、アレイヤも口を閉ざすしかない。これから心配が絶えないような気がしたのは、『氣のせいではないだろう』

鬼ごっこを終えて部屋に連れ戻された御子は、ソファにドカッと座つた。

「さあ、まずは朝食にしましょう」

リディスが机に朝食の準備をしている様子を見ていた御子は、おもむろを口を開いた。

「お前は一体何なんだ」

「えっ？」

リディスは手を止めて御子の顔を見た。言葉の意味を捉え切れな

くて、返事をする事が出来なかつた。

「いきなり部屋に入つてきたと思つたら、俺を風呂に入れて勉強させて。説教も始まつて、俺には一言をしゃべらせないし」

御子の言葉を聞いて、リディスはある事に気が付いた。

「そういえば、自己紹介していませんでしたね」

「……気付いてなかつたのか」

「あんまりにも全てが悲惨だつたもので、アハハハツ」

呑気に笑うリディスのマイペースさに、御子はガクツと力が抜けた。

「申し遅れました。私はこの度御子の護衛となりました、翼持つ守護者のリディスと申します」

「翼持つ守護者？ どうして知識の箱じゃないお前が世話係に？」

御子の世話係には、身の回りの世話の他に家庭教師の仕事も入っていた。そのために、今までの世話係は知識の箱から選抜される事が多かつた。

戦士の種族である翼持つ守護者は基本的に最低限の教育しか受けず、ほとんどの時間は戦闘訓練にあてる。リディスのように、誰かに教えられるほどの知識は本来持つていなければずなのだ。

「一応この度は、護衛という名目で任じられてます。それに、知識の箱程ではありませんが、多少の教育なら私も受けています」

神の護衛と言うが、神は宮殿から離れる事がほとんどないので、基本的に自由な時間が多い。暇を持て余したリディスは、神に頼んで教育を受けていたのだ。

「これから、よろしくお願ひします」

笑顔で言うリディスを見て、御子は厄介なのが来たと思った。今までだつたら、軽く悪戯すれば皆すぐに根を上げたが、今回は簡単にいきそくにないみたいだ。悔しそうに目を逸らす。

リディスは少し表情を悲しそうに歪めた。小さく咳くよつに、言葉を紡いだ。

「そんなに他人が嫌いですか？」

御子はリディスを睨みながら、思いつきり怒鳴った。険しい表情を形作るその目には、わずかに憎悪が含まれていた。

「ああ、嫌いだ！ 母さんを殺した翼持つ守護者は特にな！」

リディスはさらに表情の歪みを深めた。予想していたが、実際に言葉にされると胸に響く。

樂園ゼイラが生み出されてから数百年の時が流れた頃。

神と女神の間に御子が生まれた。その頃はまだ翼持つ守護者は存在していなかった。

代わりに女神を守る近衛隊として守り番ガーディアンと呼ばれる種族がいた。彼らは武術に秀でた種族として、女神の為に神が生み出した。数は男女二人ずつしかなく、ゆっくりと同胞を増やしていくはずだった。しかし、ある日守り番の一人が女神と恋に落ちてしまった。それが神に伝わり、守り番の四人は生殖能力を奪われ、翼を持つて花からでしか子孫を残せない翼持つ守護者に転生させられた。

女神と恋に落ちた守り番は、転生した後牢屋にて終身刑を言い渡された。他の翼持つ守護者は戦士の任を永久に就く事になる。いわばこれは罪だ。

リディスやアレイヤは転生組で、前世の守り番としての記憶は残っている。

女神は恋に落ちた守り番との子を身こもつてしまい、守り番を忘れられないあまり、お腹の子と共に自害したのだ。

まだ幼かった御子にとつて、翼持つ守護者が殺したと思つても無理は無いだろう。

「あなたのおつしやりたい事はよく分かります。あなたにとつて私は、憎い敵かたきの同胞ですから」

悲しみの表情を浮かべていたリディスは、真剣な面差しに変える。「しかし、だからと言つて私も引き下がるわけには参りません。樂園に住む全ての民の為に、あなたは神とならなければいけない。その為に、私は護衛に任じられたのです」

リディスの真剣な顔に、御子は何も言い返せなかつた。

「別に私が嫌いでも構いません。お勉強はしっかり、していただき
ます」

そう、決して悪い人物じゃない。

だが、素直に相手と話し合えないのじゃない。我が仮に育つてし
まつたのでもない。

人が信じられなくて仕方ないんだ。わたくしたち翼持つ守護者が憎くて堪らな
いんだ。

出会い方は最悪だったが、二人の生活は始まった。そしてこれが、
全ての始まりでもある。

第四話 あなたが持つのは憎しみの薙だが、

鳥のさえずりが聞こえ、カーテンを開けっぱなしにしていた窓から朝の陽光が入り込んでくる。

リディスの部屋は、居間の奥にある扉が寝室に繋がっている造りである。寝室は三人寝ても十分広いベッドの他に、クローゼット、小さなテーブルと椅子が置かれているくらいだ。

目が覚めたりディスは上体を起こし、欠伸をしながらベッドから出た。パジャマ代わりに着ていたシャツを脱ぎ、クローゼットから着替えを出す。

「アレイヤー、もう朝だぞー」

シャツに腕を通しながら、未だに眠りの世界から脱出していない片割れを見た。全く起きる気配が無い。寝起きの悪さも昔と変わっていなかつた。リディスは着替えを中断してベッドに近付いた。

「朝だ、ぞ！」

言葉を言い終えると共に、アレイヤの身体に思いつきり蹴りを入れた。

「ガツ！」

アレイヤは勢い良く起き上がり叫んだ。

「痛いぞ、リディス！」

「朝だつて言つてるだろ？ 着替えは自分の部屋にしかないんだから、早くしないと遅れるぞ」

「……分かつてるよ」

アレイヤは渋々ベッドから出て、置いてあつた自分の服を着た。蹴られた箇所が痛み、思わず顔を顰める。

「大体、どうして最近私の部屋で寝るんだ。自分の部屋で寝ろ」

「俺はお前と違つて纖細なんだ。神の護衛になつてから落ち着かないんだよ。少しは双子の兄貴を思いやる心はないのか」

「はいはい。お兄様は大変だねー」

シャツのボタンを締めながら、リディスは適当に相槌を打つ。

「心がこもってない」

「期待する方が間違いだろう。それより前世の兄妹のネタを引っ張るな。今の私は女でもないし、お前も男じゃない」

片割れを呆れた目で見ながらリディスは言った。

「良いじゃなか別に。記憶は残ってるんだし、引っ張つたって問題ないし」

「お前なあ」

「そういえば聞きそびれてたけど、御子とはどうだったんだ」

思い出した素振りをしたアレイヤは、言葉を紡ぎながら片割れを見る。

リディスは一瞬間を空けて、静かに呟いた。

「……女神を殺した私たちが、大嫌いだつて」

アレイヤは一瞬目を見開いたが、すぐに表情を戻した。それから何も言わなかつた。

あまり思い出したくないという自分の気持ちを瞬時に悟ってくれたアレイヤに、リディスは心から感謝した。さすが双子なだけある。着替えを終えた二人は、居間を通り、廊下に出た。左へ行けば食堂。右へ行けば出口がある。

「どうするんだ、これから」

嫌いでも構わないと言つたものの、いざ面と向かつて言われると傷付く。しかし、そんな事も言つてられない。

「もちろん、護衛は続けるよ。大嫌いでも、勉強はきちんととしてもらわないと

先ほどまで沈んでいた片割れの、意志の強さが表れた表情に、アレイヤは一瞬驚いた。

「お前のそういう所、ある意味尊敬するよ」

双子はお互いの顔を見つめ合つた後、フフッと笑つた。

「じゃあ、私は先に食堂へ行くよ」

「ああ」

リティスは左へ、アレイヤは右の方向へ進んでいった。

食事を終えたりティスは、すぐに御子の部屋へと向かつた。
昨日の今日なので、また何があるんじやないのかと一瞬不安になる。

「さすがに応えるな……」

リティスの頭の中で、前世の記憶が走馬灯のように駆け抜けた。
ガーディアン 守り番だったころの自分は、女神とよくお茶を飲みながらおしゃべりをする少女だった。アレイヤとは前世でも双子として共に生まれ、兄と呼んで仲良く暮らしていた。しかし、楽しかった時間は、同胞の罪によつて終わりを告げた。

母のよつに慕つていた女神は死に、自分は性別を失う代わりに翼を得て生まれ変わつた。しかし、辛かつたのは御子も同じだ。

別の男と関係を持つた母を、御子はどう思つただろう。裏切られたと感じただろうか。否定されたと傷付いただろうか。周りにいる者たちを、どうこう目で見ながら生きてきたのだろう。

過去の記憶に浸つているうちに、リティスはいつの間にか御子の部屋の前に辿り着いていた。今もこの向こうで、御子は何を思つているだろ？

一回程ノックした後、ゆっくりと扉を開いた。昨日同様未だに眠つていると思ひきや、ベッドは、もぬけの殻だった。

「御子……？」

それどころか部屋中捜しても姿が見当たらない。

「どこに行つたんだろ？」

とりあえずリティスは、部屋を出て富殿の中を捜した。

「可哀想に。御子、元気を出して下さこませ
「御子。私共がずっとお側におりますよ」

聞き飽きた言葉。心の中では何も思っていない、上辺だけの言葉。母が死んだと聞かされてから、毎日同じ言葉を口にする者たち。

『可哀想に』『辛かつたでしょ』に

僕を可哀想な子にしているのも、僕の心を辛くしているのも、全部お前たちだ。

誰も信じない。何もいらない。僕は一人で良い。

一人なら裏切られる事は無い。傷つく事も無い。何も無い世界が、僕の居場所だ。

使われていない部屋を一つ一つ見て周り、やがてリディスは中庭にやって来た。しかし、色とりどりの庭園は広い。仕方なくリディスは白い翼を広げ、空へ飛び立った。

庭を上から眺めるが、見えるのは庭園を管理する花小人フラーのみ。他人を嫌う御子がこんな所にいるとは思えない。

「此処にもいない。一体何処に……」

ふと意味も無く視線を上げ、視界に飛び込んできたのは女神の宮殿の側にある小さな塔。

あそこは、かつて女神のお気に入りの場所だった。女神は塔の一番上の部屋から見える庭園の景色が好きで、よくリディスも一緒に眺めていた。

「ん？」

リディスは塔の最上階の窓に人影を見つけた。女神が亡くなつて以来、あの塔は使われなくなり、誰も近づく事は無いはずだ。もしやと思い、塔に近付いてみる。距離が近くなるにつれ、なんだんと金色が認識できた。間違いない。窓辺に腰掛け、足を投げ出していたのは御子だった。

「御子……！」

リディスの声に気付き、御子は俯けていた顔を上げた。

「お前……」

リディスは御子の前で止まり、宙に浮いた状態で立ちはだかった。

広がる翼の白が、太陽の光を受けて輝く。

「何してらっしゃるんですか！ もうすぐお勉強の時間ですよ」

御子はその美しさに思わず見蕩れるが、すぐさま我に返り、嫌そ
うな表情を作った。

「どうして此処が分かつたんだ」

「『覧の通り。翼持つ守護者（ワインガーディアン）である私は空を飛べるので、高い所に
いらっしゃっても飛んでしまえば丸見えです』

御子は悔しそうにリディスを睨んだ。その目には憎悪と言ひより
も反発に似たものが含まれているように思えた。

「さあ、御子。お部屋に戻りましょう。私に捕まつて下さい

「嫌だ！」

リディスが御子の腕に触れようとした瞬間、御子がリディスの腕
を振り払つた。同時に、御子の身体が大きくバランスを崩した。

「御子！」

重力に逆らう事無く、御子の身体は地面に向かつて落下していく。
リディスは懸命に翼を羽ばたかせるが、なかなか追いつかない。
千切れるくらい腕を伸ばすが、あと数センチ。御子の身体が真下に
生えた木に落ちる寸前、リディスは渾身の力を振り絞つて御子の腕
を掴み、瞬時に自分の身体を御子の下に滑り込ませた。無我夢中で
御子の頭を抱き締めて庇う。

次の瞬間、背中に衝撃が走る。仕舞わずにいた翼が何度も枝に引
つかかり、リディスはそのまま背中から地面に落ちた。咄嗟に受身
を取つたが、背中に激痛が走る。

「ガツ！」

呻き声を上げると共に、顔を顰めた。（しか）痛みで動けないリディスの
腕の中で御子は身じろぎ、身体を起こした。

「おい、大丈夫か」

「つたたたた……」

リディスは何とか上半身を起こした。背中の痛みが治まらないが、

すぐさま笑顔を繕つた。

「お怪我はありませんか？　御子」

「それはこっちの台詞だ。それに翼が……」

目を向けた先には、枝に引っかかつて羽が痛んだ翼。美しかった白い色は薄汚れてしまっていた。

「大丈夫ですよ。羽は生え変わりますから」

リディスは痛む素振りを見せずに立ち上がつた。まだ座り込む御子に手を伸ばす。

「さあ、参りましょう」

この時の御子に、先ほどの反発と言つた感情は無く、悪さをして怒られるのを恐れている子どものよう、しょんぼりしていた。

部屋に戻る間、御子は一言も話さずリディスの後ろを歩いていた。

小さな塔と言つても、高さはそれなりにあった。その一番上から落ちたのだから、恐怖を感じて当然だ。

生まれたばかりの頃、まだ上手く飛べなかつた自分は、何度も地面に落ちて怪我をしていた。もうすっかり慣れてしまつたから、今更落ちても何も感じる事は無いが、翼を持たない御子にとっては滅多に無い経験だつただろう。

部屋に辿り着いてからも御子は口を開かず、ソファに座つて膝を抱えた。

「そういうば、朝食がまだでしたね。先に食事にしましょう。持つて参りますので、少々お待ち下さい」

返事が聞こえる事は無かつたが、リディスは気にせずそつとしておいた。

リディスが部屋を出た後、御子はソファから立ち上がつて扉を開けた。

第五話 棘の中には希望がある

食堂に向かう途中、廊下を歩いていたリディイスは、背中の激痛に思わず立ち止まつた。覚束ない足取りで壁にもたれかかって、痛みで言う事を聞かない身体を支えた。背中の他にも、今は仕舞つてゐる翼が痛む。折れてはいなが、羽を大分傷付けた。

「やせ我慢するには、ちょっと痛すぎるなあ」

昔は怪我が絶えない事もあつたが、今回は御子を庇うのに精一杯だつたので、これまでにないほど背中を地面に強く打ち付けた。だんだん背中の傷が熱を持ち始め、呼吸が荒くなつてきた。

「リディイス」

名前を呼ばれて振り向いた先にいたのは、つい先ほど別れたばかりの片割れだつた。

不思議なものをみるよつた目をしたアレイヤは、片割れの様子がおかしさを瞬時に気付き、おそるおそる近付いていく。

アレイヤの顔を見た途端、リディイスはやせ我慢していた身体の力が抜けていくのを自覚した。視線が大きく揺れ、視界が白く霞んで行く。床と挨拶する前に、間一髪でアレイヤに抱きとめられた。

「ど、どうしたんだ！？」

突然の事にアレイヤは驚愕の表情を浮かべながら、リディイスの腰に腕をまわして身体を支えた。

「ちょっと背中が痛くて……」

リディイスはアレイヤの身体にもたれかかつて服を軽く掴む。しかし、指には力が入つていな。

「まさか、怪我したのか！？」

アレイヤの問いに答えようにも、傷の痛みで声が出せない。意識もあまりはつきりせず、このまま眠つてしまいそうだった。

リディイスの様子を見かねたアレイヤは、「仕方ない」と呟いて片割れの身体をおぶさつた。怪我した背中を配慮しての事だ。

「とにかく手当てだ。お前の部屋なら応急手当の道具もあるだろ？」「でも、御子の朝食が……」

「そんな状態で持つていけるか！」

アレイヤに怒鳴られ、今のリディスは言い返す言葉も紡げず、ただ頷くしかできなかつた。

リディスは自室へ連れて行かれ、半ば強引に手当てをされた。手当てを終えると怪我した理由を聞かれ、正直に塔での出来事を話す。その間、アレイヤは黙つて耳を傾けていた。

事情を説明していくうちに、翼を枝に引っ掛けた場面になつた。アレイヤはその話になつた途端、眉を顰めてリディスに翼を見せろと言つた。

上半身は包帯以外何も纏わらず、背もたれの無い椅子に座つていたリディスが翼を出すと、アレイヤは顎が外れるくらい大きく口を開けて叫んだ。

「あーっ！ おまえ、翼が！」

表れたのは、先ほどと変わらない傷付いた翼。特に右の翼は、十数の羽が折れてぐちやぐちやになつっていた。

「なんでそんな無茶したんだ！ そのまま上に跳べば良かつただろう」

「アレイヤ、それは私に対して喧嘩を売つているのか？」

言つてからアレイヤは、しまつたと口を閉ざす。確かにアレイヤの言つ通りであるが、小柄なりディスでは御子の身体は大きい。そのまま飛ぼうとしていても、結局一人とも地面に叩きつけられたので、リディスは一瞬の判断での行動を取つたのだ。

「確かにアレイヤだつたら可能だらうけど、生憎私では持ち上げられないからな」

「悪かった、謝るから拗ねるなよ。まあ、今回は打撲で済んだから良いが、無茶するなよ。俺たち転生組は、生きて罪を償い続けなければいけないからな」

ればならないんだから「

アレイヤの真剣な表情から紡がれた言葉に、リディスは胸を打たれた。

我らは穢れた罰そのもの。守るべき女神を死に追いやった罪の証。翼持つ守護者は、滅びるのも仕方なしと言われた種族。もし花が枯れ、子孫を残せなくなつた時が来れば、それが神から『えられた罰。それでも私たちは戦士であり続ける。それだけは神から『えられた罰ではない。生まれ変わった私たちが決めた意志。

「分かつてゐるよ」

リティスは希望に溢れているように表情を輝かせる。その中に後悔と言う文字は無い。

「でも、あの時無茶してなかつたら、私は絶対後悔していたよ」
無茶した事に對して反省の色が見受けられないリティスに、アレ
イヤは二の句を継げられなかつた。

扉の隙間から黒い影が見えた気がした。

「どうした、リディイス」

「なんでもない。私はそろそろ行くよ。御子の朝食を取りに行かな
いと」

リディスは椅子から立ち上がり、翼を仕舞つて衣服を整えた。
止めても無駄だと判断したアレイヤは何も言わない代わりに、リ
ディスの頭をポンポンと軽く叩いた。

۷

片割れの意図が掴めず、リディスは首を傾げた。

裏表の無い表情に、アレイヤは思わず笑みを浮かべた。

「そういえば、どうしてアレイヤはあの時あそこへいたんだ？」
「ん？」
「ああ、ちょっとな」

はつきりとしない答えにますます意味の分からぬリディスは、
気になりながらも部屋を出た。扉を閉めるまで、何度も片割れを見

る。

「変なアレイヤ……」

結局分からずじまいだったが、リディスは気を取り直して食堂に向かった。

「我らは咎人。とがにん 同胞の大罪に気付かず、止める事ができなかつた重罪人。

だが知つてゐる。知識の箱の一部が、密かに守り番の全処刑の話が決定しようとしていたのを、神が転生の案を出して押し通したと言つ事を。

これは代償だ。生殖能力は、命を得る代わりに支払う対価。

故に我らは生き続けなければならない。のちに生まれて来る同胞に、我らは神によつて生かされているのだと伝える為に。

リディスは食事を乗せた盆を持ち、廊下を歩いた。アレイヤの手当てのおかげで大分背中の痛みは引いてきたが、まだ走るのは不可能だろう。

多くの下働きが行き交ははずの廊下に人影は無く、相変わらず静かだった。

誰もいない世界、まるで今の御子の心そのものを表してゐるようになつた。

御子の部屋に辿り着いたリディスは、ノックを二回した後、返事を待たずに扉を開けた。待つても、返されない事は分かつている。

カーテンは開いていた為に、部屋全体は明るかつた。しかし、御子が座るソファの周りだけは、なぜか闇が漂つてゐる様に感じた。リディスは机に盆を置き、御子の側で膝を付いた。

「どうして、私の部屋にいらしてたんですか」

御子の肩がピクリと跳ねる。リディスは、それを見逃さなかつた。

「……いのか……」

あまりにもか細い声だつたために、リディスは聞き取れなかつた。

首を傾げて意思表示をする。

「ひどいのか？ 背中の傷」

リディスはようやく命懸が行く。御子はリディスの怪我が気になつていたのだ。

「大丈夫ですよ。ちゃんと手当てもしましたので。わざわざ心配してくれただったのですね」

リディスが微笑みながら言うと、御子は頬をほんのり赤くして顔を逸らした。照れている事は丸分かりだ。

「どうして、あんな無茶したんだ」

「？」

リディスは問い合わせの意味が掴めず、答えを返せなかつた。御子は言葉を変えて、もう一度言つ。

「なんで、自分が怪我をしてまで、俺を庇つたんだ」

リディスは一瞬驚いた。御子までも、アレイヤと同じことを指摘したのだから。

「フフツ、ハハハハハツ」

突然笑い出したリディスに、御子は瞠目した。何が起つたのだと表情で語りながらうろたえる。

「な、なんだ」

「ハハハハツ。すみません。つい先ほども、同じ事言われたもので」

リディスは笑いが落ち着くと、一度深呼吸をした。

「なぜと聞かれても、身体が勝手に動いてしまつたので、理由は私でも分かりません」

リディスの答えに、御子は呆気に取られた。なんだかリディスの視線が落ち着かなくなり、御子は慌てて口を開く。

「お、俺はお前が嫌いだ。それは変わらない」

御子は腕も組み、 Pruittとそっぽを向く。

リディスは微笑んだ。ほんの少しだけ、御子が心を開いてくれた気がした。まだまだ先は遠いが、リディスの心の中に後悔は無かつた。

あの時みたいに、あなたの笑顔が見られる日がくるだらうか。

第六話 大嫌いなあいつは、大好きだったあの人

ふと御子は目が覚めた。見慣れた天井を一瞬見つめるとベッドの中で寝返りを打つ。側にある窓に目を向けると、カーテンの隙間から陽の光が漏れている事を確認できた。

母を亡くして部屋に閉じ籠るようになつて以来、時間など気にしなくなり、朝に目が覚める事はほとんどなかつた。

昨日から幼い頃の事をよく思い出す。ついさつき夢でも見たような気がした。

綺麗で優しくて、笑顔が暖かかつた母。

ガードィアン
守り番の男と関係を持ち、腹に宿した子と共に死んだ母。

母の宮殿の近くにある塔の部屋で、母に歌を歌つてもらうのが大好きで、いつも自分に本を読んでくれる守り番の女も大好きだつた。名前は確かマリアと言つたはずだ。

姉のような存在だつたマリアも、翼持つ守護者に転生して自分の前からいなくなつた。

翼持つ守護者が母もマリアも奪つたんだ。

御子の脳内に、幼い頃の記憶の中にいた女神とマリアの姿が駆け抜けた。

「！」

御子は状態を勢いよく起こした。今頭の中に浮かんだ姿が、最近出会つた人物と重なつた。

「リディ、ス……」

銀色の髪に銀色の瞳。性格や仕種も全て見たわけではないが、似ている部分がある。

「まさか、リディスが……」

御子が目覚める少し前、いつもより早起きしたりディスは中庭の

庭園を歩いていた。

庭園には色とりどりの花が植えられていて、美しいグラデーションが描かれている。穏やかな青嵐のような風に吹かれ、花びらや葉っぱが空を舞う。

リディスは花の一本に優しく触れた。花の甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「お前さんがリディスか」

突然老人のような声が鼓膜にぶつかり、リディスは足許に視線を落とした。

「花小人だな」
フラーーフ

リディスの視界に、緑の三角帽を被った、腰元までの身長しかない小さな老人が飛び込んできた。

老人は帽子を脱いで、丁寧に一礼した。

「初めまして、翼持つ守護者よ。儂はこの庭園の管理長しておるレウロじや。お前さんの事は、マールワから聞いておるよ」「こちらこそ初めまして、レウロ。御子の護衛になつたリディスだ」庭園の管理を任せられている花小人は植物の化身で、人型の中で最も小さな種族だ。

リディスとレウロは握手を交わした。

「気に入つてもらえたかな。此処の庭園は」

「ああ。素晴らしいよ。今も昔も、花は好きだ」

リディスは花を見つめた。しかし、それは花を見る目ではなく、まるで昔を懐かしむような目だった。

「やはり忘れられないか。生まれる前の事が」

レウロの言葉に胸を打たれ、一瞬言葉に詰まつた。

守り番だった頃の自分は花が大好きだった。女神の宮殿に造られた庭園にいつも足を運んで、花を摘んでは女神に送っていた。その度に女神は優しい笑顔で「ありがとう」と言ってくれて、それが本当に嬉しかった。

あの頃は幸せだった。笑顔が溢れ、やがて自分は子孫繁栄の為に

子を産むはずだつた。

「そうだな。否定はしないが、肯定もしないと言ひ所か」
リディスは自分を冷笑するかのようだ、口許だけで笑つた。

「そろそろ時間だ。また来させてもらひよ」

「うむ。今度は御子をお連れするといい。の方にも、一度この庭園を見ていただきたい」

「努力してみるよ」

リディスは微笑を浮かべると、レウロに背を向けて歩いていった。

「もうこんな時間。早く戻らないと見つかってしまうわ」

「離れたくない。ずっとこうしていたい」

思いを寄せていたあの人は、家族のように大好きなあの人と抱き合つていた。

見てしまつた。決してあつてはならない光景が。この愛が全てを歪めてしまつたのだ。

リディスは厨房に立ち寄り、朝食を片手に御子の部屋に向かつた。今日はどんな事を仕出かすのかと考えながら、長い廊下を踏んでいく。周りが静まり返つた扉の前に立ち、軽くノックした。

「入れ」

中から返事がして、リディスは思わず動きを一瞬止めた。刹那、我に返つたりディスはドアノブを握る。

「失礼します」

ゆつくりと扉を開いて足を踏み入れると、ソファに座つていた御子と田が合つた。

「おはようございまーす、御子。今日は随分お早いのですね」
昨日までの御子なら憎まれ口を叩いたりおうが、今日は唇を結んだまま田を逸らすだけだった。

リディスは不審に思い、手にした盆を机に置くと、御子の側で膝を付いた。下から顔を覗き込み、優しく声をかける。

「どうなさったのですか、御子。あなたらしくありませんよ」

御子は視線だけをリディスに向けると、細い声で言葉を呟いた。

「……なのか」

「え？」

リディスは自分の耳を疑つた。御子の口から、その名前を聞くとは夢にも思わなかつた。

「お前が、マリアなのか」

リディスは瞠目した。震える唇を無理矢理動かして尋ねた。

「覚えて、いたのですか？」

「今朝、マリアの事を思い出していたら、お前の姿と重なつた」

リディスは言葉を詰まらせた。

確かに、自分の前世を覚えていないかと期待はした。でも、いざ尋ねられると、どうすればいいのか分からぬ。

御子の真っ直ぐな目に耐えられず、リディスは決心して口を開いた。

「仰るとおり、私の前世はマリアと言つ名前の女でした。女神のお側を守り、御子のお世話をしておりました」

「じゃあ、何故言わなかつた！　自分がマリアだと」

「言える訳ないでしよう。私は、あなたから女神を奪つた者の同胞なのですよ。我ら翼持つ守護者は罪の証。神から与えられた罰そのものなんです。あれほど、私に懐いて下せつたあなたに、こんな私を知られたくないなかつた」

昔を思い出すたびに、幼い頃の御子の顔が脳裏を過ぎる。あの眩しい笑顔を思い出すたびに、胸が締め付けられる。

眩しそぎて、無邪気すぎて、穢れた自分が憎らしかつた。

リディスは今にも泣き出しそうな表情をしながら、か細い声で言葉を紡ぎ続けた。

翼持つ守護者が嫌いだつた御子だが、それ以上何も言えなかつた。

自分が情けなくなつた御子はソファを離れ、近くにあつた本棚から一冊の本を取り出した。

背表紙がボロボロになつて取れかけ、ページは半分以上が色褪せている。

リディスはその本に見覚えがあつた。

「それは……」

「小さい頃、よくマリアに読んでもらつた物だ。今度はリディスが読んでくれ」

「……！　は、初めて、名前を」

初めて今の名前を呼んでもらい、穢れた今の自分を受け入れられたような気がした。

今まで心を締め付けていた物が解けていくような感覚を味わい、心も身体も軽くなつたような気がした。

リディスは本を手に取り、御子の隣に腰掛けた。

「まだ持つていらしたんですね。いつも御子はこの本が良いとせがんで。私は何度も読ませました」

穏やかな笑みを浮かべながら、リディスは本のページを捲つた。前世と比べると低くなつた声で、歌うように読み上げていく。

「ある所に一人の少年が、村人や動物たちと仲良く暮らしておりました……」

御子は声に耳を傾けながら、リディスの横顔を見つめた。

辛かつたのは自分だけじゃない。あんなにも母と自分を愛してくれたマリアも、同胞の犯した罪のせいであなとなつた。

性別を失い、女らしさがなくなつたが、面影は残っている。大好きだったマリアに。

転生してからこれまで、リディスは罪を背負いながら生きてきた。何度も自分を責めただろう。自分が罪を犯したわけではないのに、何度も自分を咎めただろう。

リディスはふと隣から寝息を聞き取つて視線を動かすと、御子が眠っている事に気が付いた。口許だけで笑うと、ベッドから毛布を持つてきて御子にかける。

「これからずっとお側にいて、あなたをお守りいたします。御子」もう一度御子の隣に座り、優しく肩を寄せた。

憎い。神が憎い。全てを奪つた、あいつが憎い……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2481f/>

翼持つ守護者

2010年10月10日13時10分発行